



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小川未明「血の車輪」論：反テクノロジーという基層
Author(s)	増井, 真琴
Citation	国語国文研究, 151, 72-88
Issue Date	2018-06-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89735
Type	journal article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_151_72-88.pdf



小川未明「血の車輪」論

——反テクノロジーという基層

増 井 真 琴

はじめに

小川未明「血の車輪」は、大正一一年一〇月、雑誌「文学世界」創刊号へ掲載された小説である。物語は二部構成の短編で、前半は、村出身の老婆と孫の少年が都会の「ペ市」で汽車見学をする話、後半は、その数年後、青年となった孫や一般民衆が、兵士の輸送を司る老將校によって、前記の汽車に轢殺される話である。初出後は小説集『彼等の行く方へ』（総文館、大正一二年二月）へ初収された。戦後刊行された講談社版の小説全集のみならず、生前発行の選集類にも軒並み収録されているから、未明自身、自負するところのある作品であつたに違いない。

しかし、今日までの小川未明研究史を振り返ってみると、小説家としての未明の活動に対する注目や評価は、全体として必ずしも高いとは言えない状況にある。大正一五年の「童話作家宣言」以前、

未明は小説と童話を並行して書き分ける両刀使いだったわけだが、戦後長らく、童話中心の未明受容が続いた経緯もあって、これらの小説は、もはや忘れ去られつつある感が否めない。全集に採録されていない未収録作品は、今なお大量に眠っているし、運よく採録されている本作にしても、個別の作品論は著されていないのが現状だからである。紅野敏郎が『定本小川未明小説全集』第五卷（講談社、昭和五四年八月）の「解説」で若干の論評を試みている他、続橋達雄が『未明童話の研究』（明治書院、昭和五二年一月）の「野薔薇」の節で触れているあたりが関の山だ。

故に筆者は、今回、小説「血の車輪」と正面から向き合うことで、本作が論及するに値する好篇である事実を証明したい。何が面白いのか、と言えば、それは本作や同時代の汽車表象に顕現する反近代、文明的志向である（二・三節）。萩原朔太郎・宮沢賢治・夏目漱石といった他作家の汽車表象とは趣きを異にする、この反近代性は、明治維新以来、近代化を推進してやまない帝国日本に対するエッジの

効いた文明批評であると同時に、大正・昭和初期、社会主義者として名を轟かせた未明の左翼思想のある種の弱点を告げ知らせてもいた(四節)。

以下、本稿では、当時の一次資料から窺い知れる、小川未明の社会主義思想の知られざる内実も視野に入れながら(一節)、これらの点を明らかにしたいと思うのである。本稿が、小説家・未明を再評価する一助となれば、大変嬉しい。

一、大正一一年一〇月前後の未明

本節では、作品解釈の前段として、「血の車輪」が発表された大正一一年一〇月前後の小川未明の文壇的位置および思想傾向を見定めたい。

周知の通り、大正一一年という年は、大正デモクラシー下、日本の社会(主義)運動が著しい高揚を見せた一年である。この年、本邦では、全国水平社(三月)、日本農民組合(四月)、日本共産党(七月)など、無産階級を指導する強力な運動体が複数登場した。山川均らの「前衛」(一月)、市川正一らの「無産階級」(四月)、東大・新人会系の「社会思想」(四月)、早大・建設者同盟の「建設者」(一〇月)、日本共産党系の「農民運動」(九月)「労働新聞」(一〇月)といった、左派系の定期刊行物が相次いで創刊されたのもこの年だ。他方、世界に目を転じれば、ロシア・ウクライナ・ペラルーシ・ザカフカースの四共和国は、年の暮れ、ソビエト社会主義共和国連邦を樹立している。当時の「現代思想」たる社会主義は、文字通り、

時代を席卷していたのである。

このような情勢は、当然、文壇とも無縁ではなかった。宮島新三郎は、「今年の創作界の印象」(「新潮」大正一一年二月)で、大正一一年の文芸に波及した「最も大きな影響の一つはプロレタリア文学の主張」であると述べ、「それが漸時意義を齎して論議の中心となつたのは、今年のことに属します」と述懐している。また、小島徳弥は、「大正十一年創作壇の人々」(「早稲田文学」大正一一年二月)で、「本年度に於ける我が文壇の最も著しい現象といへば、それは文壇が階級を発見したことである。階級といふものは、一般の社会だけにあつて文壇にはないのだとされてゐたのが、本年に入つて文壇にも矢張り階級の厳存してゐることが知られた」と述べ、作家の依つて立つ帰属階級の闡明化を、本年文壇の特徴として挙げた。つまり、この時期、社会主義という思想に対する、個々の作家のスタンスが、厳しく問われるようになっていたのである。^(注1)

そんな中、未明は文壇内部で、いかなる評価を受けていたのだろうか。前掲の論文において、宮島は、「ブルジョア生活に対して極度の反抗を試み」、「プロレタリアのために大気焔をあげた」作家として、未明の名を筆頭に掲げている。小島もまた、「小川未明氏は、早くより社会主義的精神の詩化といふことを心掛けて、それに向つて一意専心努力した人である」と記し、未明の芸術の基底に「社会主義的精神」が流露している旨、指摘した。津田光造は、ブルジョアに阿諛追従する作家が多い中、「独り未明氏は、飽迄も無産者の友人として、無産者の幸福な世界の創造の事に一命を挙げて努力しつつ敢然たる歩みが続けて来た」(「血に染む夕陽」)「種蒔く人」大正一

一年四月」と、無産者に寄り添う未明の姿勢を賞美している。プロレタリアート解放に尽くすベテラン作家、というのが、当時の最大公約数的な見解と言えようか。^(注2)

実際、大正一一年の未明の足跡は、「無産者の友人」の名に恥じないものだった。まず、この年の三月、未明は山川均・平林初之輔・江口渙ら、文士三〇名あまりとともに、自由思想家組合を立ち上げている（「自由思想組合を組織し過激思想取締に反対の氣勢」『読売新聞』大正一一年三月二二日）。これは、高橋是清内閣が、第四回帝国議会へ提出した「過激社会運動取締法案」——共產主義・無政府主義など「朝憲を紊乱する事項」の実行・宣伝者を懲罰するための法案。治安維持法の先駆けとなった——を批判し、廃案に追い込むための運動体だ。五月には、「労働祭は、全世界の無産階級の結束すべき日だ。正当なる権利によつて、ブルジョアを脅威せよ！」（『時事新報』大正一一年五月一日夕刊）と叫びながら、出版従業員組合の組合員として、第三回メーデーへ参加。友愛会の鈴木文治と言葉を交わしている（亮平老史「未明管見」「種蒔く人」大正一一年六月）。

その他、未明は、八月、商業会議所の主催する「節約デー」に反対する「御馳走デー」を企画したり（「節約デー反対に文壇のプロさん達が黒石氏の宅で御馳走デー」『朝日新聞』大正一一年八月二九日）、九月、ロシア飢饉救済を目的とする東大新人会の演説会へ出演したりもした（『学芸だより』「朝日新聞」大正一一年九月二〇日）。時事問題に対応した、アクチュアルな闘争の現場へ、積極的に参加している様子が窺える。^(注4)

一方、本業の文筆はどうか。この時期の未明の言説で、特に注視すべきなのは、大正期の未明「アナキズム系作家という従来積み重ねられてきた通説」とは逆に、彼が共產主義の思想・運動に対して、好意的な態度を示している点である。^(注5)

例えば、ロシアの一〇月革命——グレゴリオ暦では一月七日——五周年に合わせて寄せた、次のような文章を見てみよう。

私達はまた露西亞によつて、正義の国が必ずしもこの地上に建設されることの不可能でない事実を知つた。露西亞の革命は、全世界の無産階級の気力と、精神とを一洗したばかりでなく、萎靡から蘇生させた。露西亞の存在は、全世界の無産階級の強みである。露西亞は、全世界の無産階級のために存在しなければならない。

「露西亞は存在す」（『朝日新聞』大正一一年一月八日）この時期、未明は、共產主義革命を成した遂げたロシアを、「正義の国」「全世界の無産階級の強み」と称賛している。「今日では、レーニンを殺伐な組織の上の革命家とのみ見るものは少なくなつたやうです。彼は、殉教者であり、熱烈な無産階級の代弁者であり、また、実に其のものであるのです」（『民衆芸術の精神』『生活の火』精華書院、大正一一年七月）、「レーニンは死んでも、その精神は死なない。後から、後からレーニンは産れる」（『レーニン若し死なば』『解放』大正一一年八月）と、国父・レーニンの精神を賛美してもいた。

また、評論「力を有せざる運動」（『時事新報』大正一二年二月二

七・二八日)では、「思ふに、茲にロシヤに於けるが如き共產主義と、純粹のアナキズムと、又人間運動としてのダダイズムがあるとする。そしてどれを取りどれを正しいかと問はれた時に、私は容易に何れであるかを答へることが出来ない。(中略) 本当に全的人間として生きる上にはこれらの思想は一人に於ても共有さるべきものだ」と述べ、共產主義・アナキズム・ダダイズムの三思想に、甲乙付け難い、三者三様の正義を看取している。^(注6)

文壇の人々も、未明の共產主義への親和性を認識していた。前田河広一郎は、「小川未明の場合には、ボルシエヴィズムの一部否定と一部肯定とをもつて、『プロレタリア』其自身の政治に参与している」(『小川未明論』「早稲田文学」大正一二年四月)と、ボルシエビズムを部分肯定する未明の姿を捉えているし、林政雄は、「未明氏の思想はボルシエヴィストの思想であるか、トアナキストの思想であるか私達は斯の『人間性のために』全編を通じては知る由もない。或は部分はボルシエヴィズムの声であり或る個処はゼアナアストの叫びである」(『小川未明氏の近業二つ』「新興文学」大正一二年四月)と、アナボルどちらにも解釈し得る、未明思想の両義性を指摘している。

水守亀之助は、「マルクスなぞよりはクロポトキンの方が、ボルシエキズムなどよりはアナキズムの方を敬びさうに思つてゐた」未明が、「いつしか、マルキシストとして、又、ボルシエキズムの信奉者としての旗色を鮮やかにして来られた」近況を報告している(『昔の小川未明氏と今の小川未明氏』「読売新聞」大正一二年六月一日)^(注7)。

先にも述べた通り、これまで、大正年間の小川未明の社会主義への接近は、アナキズムの範疇で理解するのが通例であり、共產主義への親和性は等閑に付されてきたわけだけれど、実際は、アナモボルも含み合わせた、未分化の状態にあつたと言ふべきであろう。小川未明史の抜本的な書き換えが必要だ。

二、小説「血の車輪」——民衆を轢殺する「1962」

それでは、このような小川未明の文壇・思想上の立ち位置を念頭に置きつつ、小説「血の車輪」を読んで行こう。

まず、先行研究だが、管見の限り、本作に関する独立した作品論は見当たらない。^(注8) 紅野敏郎と続橋達雄の二氏が、全集の解説等で部分的に論及しているのみである。紅野は、「解説」(『定本小川未明小説全集』第五卷、講談社、昭和五四年八月)で、「血の車輪」には、近代文明の生み出した象徴的産物である汽車の魔物性にふれつつ、さらにその汽車に、無理やりに父や夫や子供が乗せられ、「祖国の危急には換へられない」という論理のもとに、目的地向つて進む姿が描かれ、しかも進行する汽車にわれとわが体をぶつけ、阻止しようとした青年が登場する」と、その内容を概括している。だがしかし、概括以上の批評・分析があるかと言われれば、ない。

一方、続橋は、『未明童話の研究』(明治書院、昭和五二年一月)の「野薔薇」の節で、本作には、「国家権力が祖国の危機の名において民衆の自由・幸福をふみにじる非常冷酷を告発」する国家権力批判と、小説「柩」(『早稲田文学』明治四〇年八月)や、童話「眠い

町」(「日本少年」大正三年五月)以来続く機械文明批判の、二つの異なるモチーフがドッキングされている旨、指摘している。続橋の論評は、紅野に比べれば精緻だし、贅言を要さず核心を突いているとも思うけれど、全体として、大掴みな印象は否めない。具体的なテキスト分析が、ほとんどないからである。以下、本節では、作品本文へ寄り添いつつ、「血の車輪」の読み直しを図りたい。

読解の鍵となるのは、テキストの「汽車」表象である。作中、各所に点綴される、この汽車表象の中にこそ、「血の車輪」の批評性と、大正一一年一〇月前後の未明の近代文明観が凝縮されていると筆者は考える。どういうことか。

本作において汽車は、人間に敵対する、禍々しいほどの暴力性を帯びた存在として描出されている。それが端的に表れているのが、老婆が汽車を名指しする際に繰り返し使う、「魔物」という言葉だ。老婆は「お前、誰が、こんなに怖しげな魔物を造つたのか知つてゐるか」と汽車を畏怖し、「人間ちゅものは、何といふ身の程を知らねえ馬鹿だかのう。いんまに、自分の造つた、この魔物に命を取られるといふことが分かんねえだかのう」「おらあ、気のせえか、この魔物が沢山こと人間を喰ひ殺すやうな気がしてなんねえだが……」と、汽車が人々を惨殺する末路を予言している。地の文「語り手もまた、「婆さんの眼には、この文明が算出した器械が、さながら生きてゐる魔物」になつて見えたことになんの不思議がなかつた」と述べ、老婆の汽車＝魔物という認識を是認している。

最終的に、この「魔物」が、線路へ横たわる「人間の枕木を片端から轢き碎いて」「幾百人、幾千人の人間の骨と肉とを砕き尽して」

「戦地の国境」へ幕進する——文字通り「血の車輪」である——のは、先に述べた通りだ。汽車は、兵士を戦場へ送り、その家族を圧殺する、二重の殺人機械として表象されているのである。

そしてこの殺人機械は、紅野が指摘するように、近代が生み出した文明の「象徴的産物」以外の何物でもなかった。日本の公共鉄道史は、明治五年の、新橋・横浜間の開通をもって嚆矢とするが、その輸入元は、当時の鉄道先進国のイギリスである。宇田正「近代日本と鉄道史の展開」(日本経済評論社、平成七年五月)によれば、「欧米先進資本主義諸国に追いつくための急速な「近代化」政策の推進装置として、否、むしろ「近代化」それ自体の象徴といえるほどに、鉄道はそのネットワークを通じて国内の政治的統一把握、国民経済の市場形成、国民文化の平準的発達などにきわめて重要な役割を果たしてきたのであった」。日本が近代化を成し遂げるにあたって、鉄道の受容・開発は必須事項だったのである。^(注10)

「血の車輪」の汽車表象を省みる時、鉄道と近代の密接な連関について、未明は自覚的だったと言ふべきだろう。本作の汽車の車体には、「ぴかぴか光る金文字で「362」という番号」がナンバリングされているわけだが、作中、すべての数字が漢数字で記される中で、唯一「362」という数字だけが横書きのアラビア数字で表記されているのは、汽車と西洋近代を接合する暗喩に他ならない。そして、かつて「遠方の町」へ行く汽車に「眼を輝やかし」、汽車を魔物視する老婆を「くすくす笑」っていた青年(「なあ、おばあや、そんなことはねえだよ。安心さつしやい。(中略)人間が造つたもの、やはり人間の方が偉いにきまつてゐる」)が、轢殺される直前、最後に目

にし、「恐怖と混乱」を感じたものは、迫り来る「1932」のびかびか光る番号」であった。皮肉というべきか、青年は、自らが拝跪した西洋近代文明Ⅱ「1932」に虐殺されてしまったのである。

小説「血の車輪」の批評性は、近代日本が近代化を国是とするが故に、ともすれば閑却されている文明の暴力という問題を、卓抜な汽車表象や身体的な畏怖感覚を通して、グロテスクなまでに露見させた点にあるだろう。

創作の背景にあるのは、おそらく未明の実体験だ。未明は、雑誌「中央公論」のアンケート「今年中一番私の心を動かした事」（大正一一年一二月）の「今年中一番私に嫌忌の念を起した事」という設問に対して、「上り屋敷にゐた時武蔵野線で、青年の轢死者があり、その血がガードに流れてゐるのを洗はずに五六日もそのままにしてあつたこと」と回答している。岡上鈴江・滑川道夫作成の「年譜」(『定本小川未明童話全集』第一四巻、講談社、昭和五二年一二月)によれば、未明一家が上り屋敷駅(現在は廢駅、近くの豊島区雑司ヶ谷に住んでいたのは、大正一一年六月から八月の二・三ヵ月ほど。本作の一次資料の巻末には「一九二二、八作」の文字があるから、未明は直近の体験に触発されて、筆を執つたに違いない。彼はまさしく、現実の「血の車輪」(の残骸)を目撃していたのである。

加えて、これは作品発表以後の話だが、大正二二年五月のメーデーの日にも、未明は本物の「血の車輪」と遭遇した。この日の朝、未明は、前田河広一郎・島中雄三と連れ立って、芝公園のメーデーへ向かつていたところ、飯田橋付近で、電車が自転車に乗った「小僧」と衝突。

当時の様子を、前田河は次のように回想している。

「轢いた、轢いた！」乗客は総立ちになった。小川君は、「電車を出ろ、出ろ！」と叫んだ。(中略)運転士に掻きあげられて、黄ろな土ぼこりを浴びた、くたくたな駄が、血、血、血、……べろべろと、口から鼻から頸から、鮮々しい血を吐いて、人形のやうな二本の足を投げ出してゐる。

前田河広一郎「メーデー印象記」(『種蒔く人』大正一二年七月) この凄惨な事故については、未明も感想「自動車を停める」(『解放』大正一二年七月)で言及している。事故後、未明は「無産者の子供であるばかりに、あんな目に遇つたんです。もしブルジョアの子供なら、あの年頃では、みんな学校に行つてゐて、こんな場処を走り廻はつてゐることもなかつたでせう」というS君Ⅱ島中の意見に、「深い感動」を覚えたようだ。

かくて本文中では、「最近科学が進歩を重ねるにつれて、いろいろの機械が発明された。そして、喜ぶものは、畢竟有産階級ばかりであつた」「独り、自動車ばかりでなく、すべての発明品は、却つて、それ等があることのために、人類を益したといふよりは、大衆、無産階級と、有産階級との差別をいよいよ隔絶ならしめたといつた方が至当である」と、自らの近代文明観を披瀝している。

つまり、煎じて言えば、特権階級のみを利し、無産階級を迫害するものであるというのが、大正一一年一〇月前後の小川未明の近代文明観だ。そしてこの文明観は、老將校(特権階級)に支配される

汽車（文明）に轢殺される——あるいは戦地へ輸送される——民衆（無産階級）というかたちで、抜かりなく、「血の車輪」に形象化されていたのである。

三、同時代の汽車・鉄道表象

——人間を襲撃する「魔物」

ところで興味深いのは、大正期の小川未明には、汽車・鉄道を題材化した文学作品が、「血の車輪」以外にも、複数存在することである。そして、それらの作品における汽車・鉄道表象は、「血の車輪」におけるそれと、極めて類似した内容を持つ。本節では、小説「文明の狂人」（「文章世界」大正七年四月）、「停車場近く」（「新興文学」大正十一年一月）、「踏切番の幻影」（「中央公論」大正十三年一月）の三編を取り上げ、比較の俎上に載せたい。

「文明の狂人」（「文章世界」大正七年四月）は一人称小説。主人公は新聞夜勤記者の「私」だ。私は老母と、「母一人、子一人の貧しい生活をしてゐた」が、ある時、親孝行として、老母に温泉旅行をプレゼントする。しかし、その道すがら、老母は温泉地のS駅のプラットホームで足を踏み外し、汽車から転落してしまった。

私は、負傷の原因である汽車に対して、次のように憤激する。

あの巨大な鋼鉄で造られてゐる機関車と、黒い煙を吐いて、グラグラ煮え沸つてゐる釜が絶えず怖い呻りを上げてゐるのに、而して幾台となく、莫大な重量を載積する列車とが連結してゐる、文明の怖い魔力のある利器と、年老つたしかも力の

衰へた母と相撲になると思はれるのか？

私にとって、年老いた母を傷付けたのは、運転を誤った運転手である以上に、汽車という「文明の怖い魔力」だった。だからこそ私は、「汽車が黒い煙を上げて鉄橋に差しかかる刹那、轟然と脱線して河中に墜落する光景を眼に描いて、思はず声を立てんばかりに胸を躍らした」などと、汽車の破壊を妄想せずにはいられない。

しかし、「連夜の睡眠不足から、神経衰弱の症状が著しくなつた」私は、作品末に至ると、逆に、汽車によって圧殺される民衆の姿を妄想するようになる。思い浮かべるのは、奉公人の少年・広吉や商人のその父親といった、総じて、かつて出会い、既に息絶えた社会的弱者である。

……次に……次に……私は、いづれもこの世の中から虐げられて、黙々として死んで行つた人々の姿をこの線路の上に認めたのであつた。（中略）汽車が来た！ 汽車が来た！ 私は、あ危ない！ 危ない！ 早く早く其処を退け！ と心で叫んだ。しかしもう遅かつた。彼等は気付かなかつた。轟然とした響きを立て、貨物列車が構内に突進して来た。而して、厚い重い、鉄の車輪の下に彼等を一人残さず轢殺してしまつた。

私の幻覚の中で、私の知る薄命の人民は、「一人残さず轢殺」されてしまつたのである。汽車を人間に敵対する暴力的な「魔物」と捉え、汽車＝文明は無産階級を迫害するものと見做す「血の車輪」

のモチーフは、本作においても、顕現している。^(注12)

「停車場近く」(「新興文学」大正十一年一月)は三人称小説。主人公は電信技手のHだ。「文明の狂人」の私と同様、Hは神経衰弱に悩む、陰鬱な男である。彼は「生の享楽を感じるよりは、寧ろより多く苦痛を感じ」、「いつも、暗い停車場の構内に光つてゐるレールを見ると死を考へる」自殺願望保持者でもあった。

Hはある日の早朝、町を散歩していたところ、材木屋の前で倒れる瀕死の労働者を発見する。聞けば、この労働者は病気で働けなくなつてしまい、宿へ泊る金もないらしい。つまり、病持ちの生活困窮者なわけだが、材木屋の肥つた主人は、冷淡にも、彼を自らの敷地内から追放してしまう。主人の雇用人は、警察に通報さへする。周囲の見物客も、誰一人として手助けしない。それから数日後、この「青白い顔」の男は「轢死者」——自殺か事故かは不明——として発見されたのである。

本作には、先の二作品と異なり、汽車を「魔物」視する描写は認められないけれど、Hにせよ、労働者にせよ、登場人物の死のイメージがすべて鉄道と関連している点は、注目に値しよう。社会から見捨てられた無産者は、最後、汽車によって、肉体を粉砕されるのである。

「踏切番の幻影」(「中央公論」大正十三年一月)は三人称小説。主人公は踏切番の老人だ。老人はある日の夕方、線路の上を歩く、「青のひよろ高い青年」を発見し、「あ、もし、もし、線路道を歩いているのではない」と声をかける。青年はその時は指示に従うが、数時間後、鉄道自殺をしてしまった。青年を轢殺した列車が、本文

中、「大きな魔物」と形容されている点は、「血の車輪」と同様である。そして、町の人々の立ち話によれば、この「魔物」が轢き殺した青年は、食にこと欠き、見知らぬ人に金をたかる貧民だったという(「二日前に、角の八百屋さんへはいって、腹が空いて歩けないから、飯を食はしてくれろと言つたのです」昨日は、荒物屋さんへ入つて来て、三拾錢ばかり借してくれろといつたさうです)。

最終的に、この青年の死が、かつて戦地で倒れた老人の息子之死と二重写しになり、老人が青年——あるいは人間一般——に対する慈悲心を回復するというのが、この物語の着地点なのだけれど、それは本稿の論旨とは関係ない。ここで筆者が問題にしたいのは、汽車が「魔物」視され、無産者たる青年がそれに轢殺される「血の車輪」との類似性である。

以上見てきた通り、小説「文明の狂人」「停車場近く」「踏切番の幻影」の三編の汽車・鉄道表象は、「血の車輪」のそれと、極めて似た内容を保持していたのであった。すなわち、「血の車輪」において、汽車は人間に敵対する暴力的な「魔物」として、あるいは無産階級の迫害者として表象されていたわけだけど、再三繰り返してきたように、そのような汽車表象はかなりの部分、前記の三作品にも散見されるのである。また、やや時間を遡ることをお許しただけなら、大正元年の著作集「北国の鴉より」(岡村盛花堂、大正元年二月)には、髑髏が線路上で横死する、1のような扉絵を発見できたりもする。系統は同じだ。^(注13)

では何故、かかる汽車表象は繰り返されたのだろうか。それは、未明が汽車という西洋近代文明を、もっと言えば、汽車を含めた西

図1 線路上で横死する髑髏



四、他作家との比較

——萩原朔太郎・宮沢賢治・夏目漱石

さてでは、汽車を「魔物」視する、このような汽車観は、同時代的に見て、とりわけ小川未明に固有のものなのだろうか。また、かかる汽車＝近代文明観は、一節で論じた未分化の社会主義思想と、いかなる連環を有しているのだろうか。本節では、汽車・鉄道を題材にした文学作品を複数例示し、他作家との偏差を辿ること、未明の汽車表象の固有性と同時代性を明らかにするとともに、そのことの持つ思想的意味について、考察を加えたい。

比較の対象は、萩原朔太郎・宮沢賢治・夏目漱石の三名とする。何故か。三者はいずれも、汽車・鉄道をモチーフにした作品を多数著した、未明と同時代の作家であり、詩・童話・小説という相異なる表現形式で、それぞれ独自の汽車像を提起しているからである。偏差を探るには打ってつけだ。

まずは、萩原朔太郎から検討したい。高橋世織が、「朔太郎テクニク」に（汽車）のヴァリエーションが登場することは、彼を論ずる者は程度差はあれ、気づき意識せざるをえなかったことだ（『夜汽車』からの眺め）『日本文学』昭和六〇年（一月）と指摘するように、朔太郎は、汽車・鉄道を素材にした作品を数多く残した作家である。例えば、彼の文壇デビュー作である詩「みちゆき」（『朱楽』大正二年五月）は、汽車上の男女を描いた詩篇だが、その後、「夜汽車」と改題の上、第四詩集『純情小曲集』へ収録された。朔太郎は、文壇

洋近代文明全般を、畏怖・嫌忌していたからに他ならない。人間・未明の根底には、科学技術の進歩を忌み嫌う、反テクノロジイという基層がある。この点については、拙稿「小川未明「時計のない村」論——ユートピアンの夢」（『日本文学文化』平成三〇年三月）でも論じた。

「血の車輪」のみならず、同時代の諸作品においても、小川未明は身体的な畏怖感覚を催させてやまない、暴力的な汽車表象を通して、近代文明への厭悪を露わにしていたのである。

デビュー当時から、自身のテキストに汽車表象を織り交ぜていたのである。

では、本作において、汽車はどのように表象されているのだろうか。詩の末文を引用してみよう。

まだ山科は過ぎずや／空氣まぐらの口金をゆるめて／そつと息をぬいてみる女／ころ／ふと二人かなしさに身をすりよせ／しのめちかき汽車の窓より外をながむれば／ところもしらぬ山里に／さも白く咲きてゐたるをだまきの花。

萩原朔太郎「夜汽車」（『純情小曲集』新潮社、大正一四年八月）

本詩で描かれているのは、目下、男女が夜汽車で、東海道線を下っている光景である。この詩について、佐々木幸綱は、「一篇は、人妻と男が夜汽車に乗って、かりそめの恋の時間を過している、という設定である」「この一篇は、いわば姦通を素材にした詩である」（『夜汽車』『国文学 解釈と教材の研究』昭和五三年一〇月）と、簡にして要を得た——身も蓋もない——解説をしているが、そう読んで、さしあたり間違いはなからう。^{〔注16〕} 明け方の車中で、密通する二人は身を寄せ合い、白く咲く「をだまきの花」を共視しているである。^{〔注17〕}

つまり、本詩において汽車は、男女が世上に認められない恋を貫徹するためのロマンスの舞台として、表象されている。初出誌の「朱欒」には、同月、萩原咲二の名で、「しのめのまだきに起きて人妻と汽車の窓よりみたるひるがほ」との短歌が掲載されているが、ここでも男と人妻は、車中から窓外の「ひるがほ」——花言葉は「情

事」——を共視している。両詩歌において、汽車は、大人の色恋を潤色するモダンな舞台装置として機能していると言えよう。人間の肉体を粉砕する「魔物」では、断じてない。

朝太郎同様、宮沢賢治もまた、自作に汽車・鉄道を多用した作家である。「銀河鉄道の夜」「シグナルとシグナレス」「青森挽歌」「樺太鉄道」「岩手軽便鉄道の一月」等、その類例は枚挙に暇がない。信時哲郎「宮沢賢治論」（『国文学 解釈と鑑賞』平成二一年六月）によれば、賢治の鉄道に対する愛好は「ファンあるいはマニアと言ってもよいくらいレベル」であり、賢治は在所である岩手近辺に鉄道が開通すると、すぐさま試乗しに出掛けていたという。^{〔注18〕} そのような乗車体験は賢治の文学創作の重要な糧となっていた、いやむしろ、汽車に乗るのが主目的で、その結果作品が生まれたに過ぎない場合も一方ならずあったと、信時は指摘している。^{〔注19〕} 今風に言えば、賢治は相当な「乗り鉄」だったようだ。

さて、そんな「鉄道ファン」（信時）たる賢治の汽車表象をすべて論じ尽くすことはできない故、ここでは彼の代表作である、童話「銀河鉄道の夜」に話を絞りたい。周知の通り、本作は生前未発表の遺稿であり、樺太への鉄道旅行——教え子の就職依頼と夭折した妹・トシとの交信を目的とする——の翌年、すなわち、大正一三年頃に起筆されたテキストである。「血の車輪」の執筆・掲載時期と近い。異世界へ行ける箱——それが本作の汽車表象の核心である。例えば、乗客の鳥捕りは、ジョバンニの汽車の切符を見て、次のように語りかける。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんたうの天上へさへ行ける切符だ。天上どこぢやない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれば、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまでも行ける筈でさあ、あなたの方大したもんですね」

宮沢賢治「銀河鉄道の夜」（最終形）

石炭や電気で動いているわけではない、この動力源不明の汽車は、「天上へさへ行ける」「どこまでも行ける」汽車である。そのことは、ジョバンニ自身、「僕たちどこまでだっていける切符持つてるんだ」と自負している点からもわかる。本作の汽車は、この世ならぬ宇宙空間（死者の国）をひた走る、異世界への交通手段に他ならない。

太澤真幸は、本汽車の越境性について、「銀河鉄道の切符によって「どこにでも行ける」という空想に具体的な現実感を付与していた社会的な背景は、ネーションからの溢出の段階にある大正期の鉄道であったということを確認しておかなくてはならない」（「ブルカニ口博士の消滅」「現代詩手帖」平成八年一月）と述べ、「満鉄」（南満州鉄道株式会社）など、同時代の帝国主義的植民地支配の現実が、賢治の想像力の基盤をなしていた由、指摘しているが、それはその通りなのであろう。いずれにせよ、汽車によって「ここではないどこか」へ飛翔せんとする、越境の想像力は、未明の暴力的かつ反人間的な汽車表象からは到底看取されない性質のものである。

かくして、朔太郎・賢治と未明の汽車表象は、そのロマンスや越

境性の有無の点で、明確に位相を異にしているわけだが、一方、未明と類似した汽車観を持っている人物もいた。夏目漱石である。や時代は遡るが、小説「草枕」の一節を見てみよう。

汽車の見える所を現実世界と云ふ。汽車程二十世紀の文明を代表するものはあるまい。何百と云ふ人間を同じ箱へ詰めて轟と通る。情け容赦はない。詰め込まれた人間は皆同程度の速力で、同一の停車場へとまつて、さうして同様に蒸汽の恩沢に浴さねばならぬ。人は汽車へ乗ると云ふ。余は積み込まれると云ふ。人は汽車で行くと云ふ。余は運搬されると云ふ。汽車程個性を軽蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によつて此個性を踏み付け様とする。

夏目漱石「草枕」（「新小説」明治三十九年九月）

引用箇所は作品末、主人公の青年画家が、停車場の茶店で、独自の「汽車論」に耽る場面である。汽車は「二十世紀の文明を代表する」利器であると同時に、人間を積み荷の如く無機的に運搬する個性の軽蔑者である——主張の論旨はこれだ。

続けて画工は、「轟と音がして、白く光る鉄路の上を、文明の長蛇が蜿蜒^{のびく}て来る。文明の長蛇は口から黒い烟を吐く」と、汽車を気味の悪い「長蛇」に例えてもいた。小関和弘は、この隱喩について、「鉄道のおどろおどろしいイメージ、それは西欧近代社会の追究する近代的合理性に対する異和へとストリートにつながると言えそう

である」(『鉄道の文学誌』日本経済評論社、平成二四年五月)と述べ、汽車を蛇に例えるグロテスクな汽車表象は、近代文明に対する違和へと直結していた旨、指摘している。正しい指摘だろう。暴力性の程度等、その表象の味は若干異なるものの、汽車を素材にした文明批評を行っている点で、漱石と未明は同一の地平に立っていると言える。^{注20)}

しかしここで問題となるのは、未明は社会主義者で、漱石はそうではないという点である。つまり、社会主義者である未明が、汽車「文明を嫌忌することには、それ固有の問題があった。というのは、共產主義にせよ、アナキズムにせよ、本来の進歩思想としての社会主義は、資本主義下の卓越した生産手段を、資本家階級の私物から労働者階級の共有物へ奪取する思想であり、発達した文明は積極的に利用すべき「革命の条件」以外の何物でもないからである。社会主義者は、その定義上、文明の革新性に依拠する存在であるべきなのだ。

例えば、マルクス主義の歴史観(唯物史観)においては、生産様式の発達こそが歴史的発展の唯一の原動力であり、生産力の拡大に伴って、社会はより高次の次元——原始共产制→奴隸制→封建制→資本主義→社会主義——へ推移していくとされる。したがって、マルクスが、「しかし、ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対関係(社会的生産過程におけるブルジョアジーとプロレタリアートの間の敵対——引用者注)の解決のための物質的諸条件をもつくりだす」(『経済学批判』岩波文庫、昭和三一年五月)と語ったように、あるいは、レーニンが、「共產主義とは

ソビエト権力に全国的電化を加えたものである」と語ったように、マルクス主義者にとって、生産力の拡大をもたらす文明^{文明}の進歩は、何ら忌むべき事柄ではない。「科学的社会主义」を標榜する旧ソビエト連邦や日本共産党が、戦後長らく、「原子力の平和利用」の名の下に、原発を推進・擁護してきたことは周知の事実である。チェルノブイリ原発事故以降、その科学神話に強烈な疑問符が突き付けられているとは言え、ある時点までの左翼にとって、文明は否定の対象では決してなかった。今でもない。

だから、「血の車輪」以下、前記の諸作品で反復された、汽車「文明をネガティブな存在——畏怖すべき「魔物」——として捉えてしまふ反科学技術的心性は、小川未明の思想的特徴であると同時に、社会主義者としての限界でもあるだろう。^{注21)}一節で論じた未明の未分化の社会主義思想には、あらかじめその限界——社会主義ならざる要素——が内包されていたと見るべきなのである。それは、後年の転向を必然化させる、ひとつの遠因でもあったかもしれない。

おわりに

以上、本稿では、小川未明の小説「血の車輪」(『文学世界』大正一一年一〇月)に関する作品分析を、作中の汽車表象へ着目しつつ、行った。

その結果、明らかになったのは、本作の汽車が人間——わけでも、無産階級——に敵対する暴力的な「魔物」として表象されていること、未明が汽車を始めとする西洋近代文明全般を畏怖・嫌忌してい

ること、そして、上記の汽車表象は、萩原朔太郎・宮沢賢治・夏目漱石といった同時代の作家のそれと比較した時、ある特異な異質性と一定の同時代性を示してもいたことである。共産主義にせよ、アナキズムにせよ、本来の進歩思想としての社会主義は、発達した文明を「革命の条件」として積極活用する思想であるから、^{テクノロジ}かかる近代文明嫌い（反科学技術的心性）は、社会主義者としての限界を告達していたと言つてよい。

とは言え、大正期の未明が、革命を希求する社会主義者として活動を展開していた事實は、今一度吟味されるべきだろう。とりわけ、従来、アナキズム一辺倒の解釈が通説化している未明においては、当時の評論や同時代評から垣間見える、共産主義思想に対するシンパシーを見過すべきではない。

国内的には日本共産党が、世界的にはソビエト社会主義共和国連邦が創立・樹立されたこの年、小川未明は自らの思想に限界を内包させつつも、時代の風潮と呼応して、疑いなく赤化していたのである。

注

1 例えば、「所謂プロレタリア文学と其作家」（「新潮」大正十二年二月）は、文壇の諸作家にプロレタリア文学・作家の是非を問う企画で、菊池寛・芥川龍之介・徳田秋声・上司小剣・近松秋江・豊島与志雄・久保田万太郎といった人々が回答を寄せている。菊池が、「所謂プロレタリアなるものは、現在では何人もが

2

否定し難い事実である。丁度、朝が来たので、太陽が昇るといふのと同じ位、間違ひのない、近い将来の事実である。又、その台頭するプロレタリアを中心としたプロレタリア文芸なるものが、僕は勃興することも否定し難い事実であると思ふ」と認めざるを得ないほど、社会主義思想は一世を風靡していた。一方、広津和郎は、「三三年後の期待」（「解放」大正十二年一月）で、「自分は今の文学者——と云ふよりも文壇の人達を大分知つてゐる。そして所謂「ブルジョア文士」と云ふ攻撃の言葉が、大体に於いて叫ばれても差支へない程度の生活気分文士達がゐるのを知つてゐる」と記し、そんな階級選択を強いる文壇の風潮を批判している。当の未明は、「私達はもつと痛切にプロレタリアの味方であるか、ブルジョアの味方であるか、その態度を決すべきである」（木村毅・本間久雄・伊藤貴磨他「文壇漫評」「早稲田文学」大正十二年四月）と叫んでいた。

「苦闘の三氏へ」（「種時く人」大正十二年七月）は、未明・秋田雨雀・中村吉蔵の文壇二〇周年を記念して、作家たちが寄せた三人の人物評である。この内、加藤一夫は「小川君は不斷の感激に生きて居る人のやうです。鋭敏なる直覚でもつて、また、純真な人道的精神でもつて、プロレタリアのために戦つて来たことを尊敬しなければならぬと思ひます」と、山内房吉は「小川未明氏、鋭い直観と性格的なフューマニズムと純な正義感とが氏をして今日あらしめたのだと思ふ。氏が時代と共に新しい所以だ。世渡り上手の、惻巧な作家などは正直者の運動であるプロレタリア運動の戦線に立つやうな損なことはしないであら

うから」と述べ、プロレタリア運動に献身する未明の歩みを評価している。

自由思想家組合に関する新聞報道——未明の情報を含む——は、他に「思想家会合 二度解散を命ぜられ遂に数名検束される」（『朝日新聞』大正十一年三月二日）、「過激思想取締に反対の自由思想組合生る」（『読売新聞』大正十一年三月十三日）がある。加えて、未明自身、「過激主義と現代人」（『読売新聞』大正十一年二月二四日）や「過激法案の不条理」（『朝日新聞』大正十一年三月一四日）で、過激社会運動取締法案を厳しく批判していた。

その他、未明は婦人運動家で、後に参議院議員を務めた奥むめをが主宰する婦人問題の集まりにも参加し、講話していた由、「職業婦人の研究会」（『朝日新聞』大正十二年五月三〇日）は報じている。また、これはほとんど知られていない事実だと思うのが、未明は同時期、女性文筆家の指導も行っていたようだ。「小川未明氏に私淑 階級組織の欠陥が課題「墓を発く」の作者藤村千代夫人語る」（『読売新聞』大正十一年五月一日）には、「私が文壇で尊敬してゐるのは小川未明氏で、これまでも上京毎によくお伺ひ致しましたが、あの創作に対する真摯な態度、そのお話振りなどに接しますと、涙ぐましい位の感動を与へられます。それらのことから違つた意味で、或ひは、思想的にも氏の影響を受けてゐるかも知れません」との藤村の発言が、「小説に筆を染め出した小森多慶子さん」（『読売新聞』大正十一年一月二八日）には、「小森多慶子さんは以前から小川未明氏に

師事して既に『銀の兎』と『星の子供』という二冊の童話集を出版して居ます」との一文が、それぞれある。

例えば、山室静は、大正期の未明の思想傾向について、「彼は上杉謙信の崇拜家の父君ゆずりの精神家で、正義と真理のために戦うべく筆をとつたのだが、その立場は人道主義とクロボトキン流の相互扶助を基調にするもので、マルクス流の唯物論と階級闘争説にはほとんどまったく無縁だった」（『解説』『定本小川未明童話全集』第二巻、講談社、昭和五十一年二月）と断じている。西本鶏介も、「未明がアナキストとして社会主義の立場に立つたのも、大衆運動の指導者たらんとするためではなく、あくまで貧しい人々への共感と同情であり、すべての人間が平等に幸福であつてほしいと願う理想主義的な思いからである」（『解説』『定本小川未明童話全集』第九巻、講談社、昭和五十二年七月）と、この時期の未明を「アナキスト」として位置付けている。続橋達雄が執筆した、『日本児童文学大事典』第一巻（大日本図書、平成五年一〇月）の小川未明の項は、「大杉栄と知りアナキズム思想の影響を受け、また、クロボトキンの相互扶助論に共鳴する」以上の思想解説を、大正年間中、行っている。

「芸術とは何ぞや 余が童話に対する所見」（『小学校』大正十一年八月一日）でも、未明は「ほんとうに子供を理解したら何もかも一切が子供にあるといふことを知らなければならぬ。ブルジョアに恐怖される共産主義の哲学も、純一なる美の世界も、無差別の社会も皆子供に存する」と述べ、「共産主義」という言

業を肯定的に使用している。その他、大正期の未明の共產主義

への親和性については、拙稿「小川未明の知識人批判——『童話作家宣言』の真意をめぐって」(『社会文学』平成二八年八月)で論じた。

吉田金重も、「苦闘の三氏へ」(『種蒔く人』大正一二二年七月)で、「しかし氏はまだまだ、社会的にも生活的にも、その渾身の努力を致されるであらうし、また致して貰はなくてはならんと思ふのです。それは氏がボルセビストであらうと、またアナキストであらうと、敢て問ふところではありません。ただ氏はいつまでも、正義の味方であると言ふことは、言い得らるるのであります」と語り、未明のボル派的な傾向を一定認めている。

同時代評としては、林政雄「小川未明氏の近業二つ」(『新興文学』大正一二二年四月)と、吉田金重「抗弁 作品の印象(下)」(『朝日新聞』大正一二二年五月四日)の二つがある。林が、「血の車輪」は、私は一番好きだった。表現派の舞台面のやうな演出と前後の關係とは、極^{マダ}単^{マダ}な、而も大胆な主観であつて、作者の表示を有効ならしめてゐた」と本作を評価するのに対し、吉田は、「誰かは「血の車輪」を表現的だなどと言つて、非常に推賞してゐた様であつたが、私らとしては寧ろ「黒い河」や「地底を歩く人」を取るものである」と述べ、さほど評価していない。

堤一郎『近代化の旗手、鉄道』(山川出版社、平成一三年五月)によれば、産業鉄道は、明治二年に敷設された、北海道柏村・茅沼炭鉱の石炭輸送線(約二・二キロメートル)がもっとも古

い。

10 日本¹⁰の鉄道建設に主導的な役割を果たした、大隈重信・伊藤博文ら明治政府幹部は、「中央集権制強化」と「殖産興業の「牽引車」的役割」の二つの効果を主に期待していたと、原田勝正『日本の鉄道』(吉川弘文館、平成三年三月)は記している。

11 その他、未明は「死の凝視によつて私の生は跳躍す」(『中央公論』大正一一年一月)で、文明の恩恵が庶民には行き渡らない現実を、次のように嘆いている。「私は、自分の生活を顧みた。この世の中の文明や、幸福が自分達の上にも分かれたらうか。自分の子供等は、欠乏を感じずに暮らしたらうか。妻は、そして、両親は? そればかりでない。私の半生に於て相知つた、其等の貧しい人達は、どんな暮らしをしただらうか。屈辱に、いつまで甘んじなければならぬといふのだらうか?」

12 紅野敏郎は、本作について、「文明の狂人」は、汽車という乗り物、「文明」なるものの「魔力」を力強く描いた、アナキシーな分子の混入した作品で、この時期の未明の時代認識をよく物語っている作品である」(『解説』『定本小川未明小説全集』第三卷、講談社、昭和五四年六月)と論評している。

13 図1の扉絵は、「北国の鴉より」収録の小説「鉄片」(『新声』明治四二年一月)を元にしていてと考えられる。この小説の主人公は村の少年・太吉。父親の孫六が、車夫の仕事で、「二十二哩^{マイル}の全速力」で疾駆する汽車に轢殺されてしまい——客の「客^客大臣」は助かる——、汽車を憎む太吉がその転覆を企てるものの、結局失敗に終わる話である。その他、汽車が人間を

14 何らかのかたちで殺傷する小説・詩に、「鉄道線路」(『新小説』明治三十九年一月)、「柩」(『早稲田文学』明治四〇年八月)、「断詩」(『未明感想小品集』創生堂、大正一五年四月)等がある。例えば、未明は「私は、あの怪物にも等しい大きな物体が、よくも、私達民衆の歩るいてゐる狭い道の間を図々しく疾走されるものだと思ふのである」「人間の肉体で、この鋼鉄で造られた機械と衝突し、抵抗することができないものでない」「自動車をとめる」「解放」(大正一二年七月)と自動車を怖れたり、「私は、いかなる名曲であつても、これを蓄音機で聞くことに興味を有しない。何のためといふに、それから、真の感激が得られないと思ふからである。飾られた室の裡で、みんなが礼儀正しく座つて、この物を言ふ機械の前に耳を傾けるよりは、街塵を浴びて、汗に汚れ、日に焼けた乞食が通る人々に対して弾くバイオリンや、尺八の音の方に、より痛切な何ものかを感じるからである」「塵埃と風と太陽」「早稲田文学」大正一一年八月)と蓄音機を批判している。

15 「夜汽車の窓に」(『新しき欲情』アルス、大正一一年四月)、「旅上」(『純情小曲集』新潮社、大正一四年八月)、「地下鉄道にて」(『氷島』第一書房、昭和九年六月)、「帰郷」(『氷島』同前)、「猫町」(『セルバン』昭和一〇年八月)等。

16 高橋世織は、初出当時、世間を賑わせていた北原白秋の姦通事件が、本詩のモチーフになっているのではないかと、「夜汽車」からの眺め」(『日本文学』昭和六〇年一月)で指摘している。「この詩を投稿した詩誌『朱槿』(この号で終刊)は白秋主宰で

あり、この詩集『純情小曲集』は白秋にデジケートされたものだ。当時の白秋の人妻事件は世上に知られていて、そこに朔太郎の自己劇化も重ね合わせられたのかもしれない」以下、高橋。「この『夜汽車』の中にあつても、二人身をすり寄せてお互い、見つめ語らうわけではない。共にひとつの外なるもの、光景を視ることを共有する。いくぶん強要気味の、まなざしの同伴」は(をだまきの花)へと焦点が結ばれる」「車窓から人妻とまなざしを共有し、白い(をだまきの花)に視点が統合される秀抜なエンディング。会話らしきものは聞こえず、こ

18

こでも消音された世界が展開された」

同じ論稿で、信時は、「賢治は新しい路線が開業すると(新しい区間が開業された場合も含めて)、少々遠くてもわざわざ乗りに行っていたことが年譜や作品日付を検討することから明らかで、開業直後の橋場軽便線(大正十年六月)、東横黒軽便線(大正十年十一月)をはじめ、山田線(大正十二年十月)、八ノ戸線(大正十三年十一月)、五所川原線(大正十四年五月)、大船渡線(大正十四年七月)などに乗っていることが確認できる」と指摘している。

19

信時の「鉄道ファン・宮沢賢治」(『賢治研究』平成一七年七月)には、「鉄道に乗りたがために取えて用事を作ったという側面もあったのではないだろうか。つまり鉱物の採集や見学、創作の方が手段であり、鉄道に乗ることの方が目的である旅も多かったように思うのである」との記述がある。

20

加藤慎行は、「汽車論」の隠喩 夏目漱石「草枕」をめぐって」

〔日本近代文学〕平成一二年五月）で、本作の汽車が、文明批評の一環として、痛烈な批判の対象になっていた由、次のように指摘している。「夏目漱石『草枕』（『新小説』一九〇六〔明治39〕年九月）は、旅行小説という側面を持ちつつも、明治期の旅行とは親密な関係だったはずの汽車を、徹底して否定的に書くようにしている。すなわち、「鉄道をかけて一儲けするの見」（一）、「汽船、汽車、権利、義務、道徳、礼儀で疲れ果て」（二）と記述される汽車は、営利的な経済活動を示す典型的事例であり、画工をうんざりさせる二十世紀的生活の代名詞なのである」山田稔は、「小川未明における思想と美学」〔『文学』昭和三十六年一〇月）で、「文明の発展にともないますます分化、肥大していく欲望（贅沢の欲求）を十分に充足しうる社会」、すなわち「快樂社会」こそが、「アナーキズムが未来にえがく理想社会のイメージ」であるのに対し、未明の思想は「禁欲主義」と結びついた「貧血のアナーキズム」であると批判している。「アナーキズム」を「共産主義」の語に置き換えても事情は同様だろうが、いずれにせよ、未明は、本来社会主義が肯定している人間の欲望やそれを充足させるための文明^{文明}を肯定的に捉えられなかったとする山田の指摘は正しい。筆者の主張する「社会主義者としての限界」は、山田論の延長線上にある。

（ますい まこと・北海道大学大学院博士後期課程）